

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会
編集 同窓会会報編集委員会
〒300-0051 茨城県土浦市真鍋4-4-2
TEL(029)822-0137(代) FAX(029)826-3521
ホームページ <http://www.sin-syu.jp/>



会長あいさつ

大野 金 一

(高8回)

平成31年度進修同窓会総会において、幡谷浩史会長のご勇退の後を受け、会長に選任されました。

一昨年度には、土浦一高・土浦中学創立120周年を記念する式典が挙行され、その記念事業の一つとして行われていた旧本館改修工事も完了いたしました。

このような伝統ある進修同窓会の会長職をお引き受けすることは、誠に光栄なことであると感ずると同時に、改めて身の引締まる思いであります。

昭和40年代以降の日本の教育では、有名大学・一流企業を目指すための受験指導が主流になりましたが、土浦一高では、学校の授業だけで合格できる学力水準を一貫して維持してまいりました。

近時は、同窓会の援助から始まった海外科学研修(SEG)や文科省から茨城県内で唯一指定されたスーパーグローバルハイスクール(SGH)の活動など、世界に目を向けた教育が進んでいます。

一方、生徒の部活動なども、県内公立高校では最も盛んで、文武両道の伝統を引き継いでいます。

また、時間を無駄に使っている若者が多い中、働きながら学習する定時制での教育も充実しています。

「同窓会」は、「そこで学んだ」とい

う事実のみで繋がっている組織であって、地位や名誉、貧富などとは全く無縁の存在です。上下の区別や格差を意識することはありません。みんな平等で、分け隔て無く付き合うことができます。

母校に寄せる感情には、厚薄濃淡の違いはあるにしても、故郷に抱く思いに似たものが、そこにはあると思えます。私も、卒業生の一人として、母校の更なる発展を期待しています。現役の後輩諸君の活躍は、私たち卒業生にとって何より嬉しいことで、元氣も貰えます。

だからこそ、我々同窓生には、必要に応じて、物心両面で母校を支えていく責務があると思えます。

現在、望ましいとは必ずしも言えない教育環境でも、生徒達は頑張っています。我々同窓会ができることは、財政的支援です。

会員の皆様には、本部の周年祝賀式にご参加賜るだけでなく、各回或いは各支部において、同窓生の絆を深めていくことなどを通じて、同窓会に関心を寄せていただきたく存じます。その上でのご支援ご協力をお願い申し上げます。

母校のますますの発展と会員各位の更なるご多幸とをご祈念申し上げ、ごあいさつに代えさせていただきます。



学校長あいさつ

学校長 植木 邦夫
(高31回)

進修同窓会の皆様には、日頃から本校教育活動の発展のために物心両面に互りご支援を賜り、深く感謝申し上げます。

私は高31回卒で、現在の大学入学センター試験の前身である共通一次「元年受験生」です。国立大学入学選抜のための全国统一試験、しかもマークシート方式導入というかつてないほどの大きな入試制度改革に、当時、日本中の高校がその対応にいかにも追われたことは想像に難くありません。

本校においても、その年、すなわち、私が高3年生として在籍していた年、学校行事等でいわゆる「スクラップ&ビルド」が行われました。例えば、それまで9月に行われていた「一高祭」が現行の6月に開催されるようになりました。それに伴い、毎年5月に行われていた水戸一高との定期戦「土水戦」が中断となり、新たに「一高オリピック」が9月に開催され、現在に至っております。まさに激動と呼ぶにふさわしい時代だったわけですが、先見性のある学校づくりを成し遂げた当時の先生方のご英断やご尽力に改めて敬服している次第でございます。

昭和54年1月に実施された共通一次試験は平成元年1月を最後に大学入試センター試験に移行しました。そして現行のセンター試験も令和2年1月に終了し、現在の2年生から大学入学共通テストが開始されます。歴史は繰り返すと言いますが、再び変革の波が押し寄せております。しかし、本校が長年に亘って積み重ねてきた教育システム、実績ある教科指導等をもってすれば全く心配には及ばないと確信

しております。

一方、既に県教育委員会から公表されていることとありますが、本校は令和3年4月に附属中学校を開校し、併設型の中高一貫教育校に改編となります。歴史的なターニングポイントとなりますが、進修同窓会の皆様のご支援ご協力を糧として、本校の更なる発展のために邁進してまいる所存です。

また、本校定時制においては地域の多様なニーズに応え、多くの志願者を育てています。陸上部、ソフトテニス部の全国大会出場をはじめ、部活動での活躍も顕著です。

結びに、進修同窓会のますますのご発展及び皆様のご健勝ご活躍を心からご祈念申し上げます。



新任職員紹介

事務室長 張替 晴男

今年度の定期異動で本校に赴任しました張替と申します。

同窓会の皆様には、母校発展のため、平素より格別のご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。校内幹事としての務めを果たすとともに、伝統ある土浦一高の更なる発展のため尽力する所存ですので、今後ともよろしくお願い致します。

平成31年度

進修同窓会総会等開かれる

令和の新時代スタートを間近に控えた4月14日(日)に、平成31年度進修同窓会定期総会が、母校体育館で、周年祝賀卒業生等を含む500名の、県内外からご足労くださった同窓生の皆様のご出席を得て、盛大に開催されました。また、例年どおり、定時制部会も、総会に先立って、関係者各位のご参加を頂き、校内食堂で開かれました。

総会は、応援指導部の元氣一杯のリードと吹奏楽部の胸迫る熱き演奏とに合わせ、校歌・応援歌・一高讃歌を全員で斉唱することから始まりました。続いて、物故会員に対する黙禱、幡谷浩史会長(高4回)と植木邦夫校長(高31回)とから挨拶があり、この後は、武井秀一副会長(高23回)を議長に選出し、議案の審議に入りました。平成30年度事業報告及び決算報告、別途積立金決算報告、監査報告、更に、幡谷会長等のご勇退を受け、新会長を大野金一氏(高8回)、新副会長を櫻井一男(高17回)、竹井茂雄(高19回)、渡邊慎一(高20回)、鈴木義人(高21回)、松井泰寿(高21回)、杉田幸雄(高29回)の各氏とす



感謝状を贈呈される熊木士郎前監事(上)。鈴木良治氏(左)。日置正克氏(右)。大野金一新会長より感謝状を贈呈される幡谷浩史前会長(右上)。応援指導部のリードで校歌・応援歌・一高讃歌を斉唱(下)。

役を仰せつかり、身の引き締まる思いが致している次第です。会員の皆様には、120周年記念事業の実施に際しては、多くの方から浄財を賜り、深く感謝致します。今後、母校が中高一貫校になる等の変化の激しい時代にあつて、尚一層のご協力をお願い申し上げます。」と、力を込めて話されました。最後に、次年度以降の総会日も原案どおり承認可決されました。その後、幡谷浩史氏(前会長)、大曾根宏亮氏(前副会

長)、青山和義氏(前副会長)、熊木士郎氏(前監事)、荒木克義氏(前事務室長)の5名の役員退任者に対する感謝状の贈呈、本会が助成する事業の一つで、平成30年度が10回目となる海外科学研修(略称SEG: Science Explorers Group 参加者:生徒38名・引率教員3名、期間:平成31年3月17日~3月27日、訪問地:ワシントンDC・ボストン・ニューヨーク)に参加した生徒の代表から、大型スクリーン(平成29年度に同窓会から学校に謹呈されたもの)を使用しての成果報告があり、総会は終了しました。

引き続き、卒業60周年(全日制11回・定時制9回)、卒業50周年(全日制21回・定時制19回)、卒業40周年(全日制31回・定時制29回)、卒業25周年(全日制46回・定時制44回)、卒業15周年(全日制56回・定時制54回)の節目を迎えられた皆様に対する卒業周年祝賀式が挙行されました。最初に、鈴木良治氏(高22回)からの祝辞があり、次いで大野会長からの各周年代表者への記念品贈呈が行われ、最後に、全ての周年を代表して、日置正克氏(高21回)から謝辞が述べられました。

祝賀式終了後の、周年ごとの懇親会は、各回幹事の骨折りで、「卒業60周年」がホテルグランド東雲に、「卒業50周年」・「卒業40周年」・「卒業25周年」・「卒業15周年」の各周年がホテルマロウド筑波に、それぞれ移動して催されました。恩師や旧友との再会を喜び合う笑顔と熱気とに包まれ、懐かしい思い出話や近況報告等に花が咲いた賀宴は、大いに盛り上がり、旧交を温める絶好の機会となりました。

(本部幹事 鴻巣 茂(高21回))

卒業60周年記念同窓会

高11回 田嶋 栄吉

「平成」最後の年の平成31年4月14日に開催された同窓会は、改修工事によって、昔ながらの美しさが甦った旧本館前にて、記念写真の撮影から始まり、出席者74名の撮影準備が整うものの、此の日迄散るのを我慢していた桜の花が、春風に吹かれて一斉に散り始めたため、なかなかシャッターチャンスが得られなかった一幕もありました。続いて、体育館に於いての同窓会総会・周年祝賀式に臨みました。同会場に着席されている40周年・25周年の方々を眺めると、私達との年代の差をはっきりと感じられました。私達の入学は昭和31年ですが、当時は土浦一中よりの入学生が80余名であり、現在の入学生数と較べると、隔世の感さえあります。在校時の強烈な印象として、今日迄記憶に残っていますのは、2年生の時、本校開校以来の壮挙として野球部の全国高校野球大会(夏の大会)への出場がありました。その時は、応援団の一員として貸切の夜行列車に乗って甲子園球場に向かいました。試合の方は2回戦にて強敵岐阜商高に惜敗致しましたが、修学旅行もなく、毎期の試験に追われた私達にとって、京都市の一泊は、楽しく記憶に残るミニ修学旅行でありました。

さて、同窓会総会・周年祝賀式会場より移動して、70名出席のもと、つくば市の「ホテル東雲」にて学年同窓会による懇親会を催しました。10年振り、30年振りにお互い会う訳ですから、卒業時の組名と姓名を書いた胸のプレートを頼りに、往時を偲び、現在有るのを互いに喜び、残る未来を語り合っており、大変楽しく有意義な一時を過ごしました。会も終



わりに近づいた頃、誰言うともなく2年後にまた学年同窓会を開催することに決定し、笑顔の内に散会致しました。最後に笑了起来が、本校の教えと校訓(自主・協同・責任)を胸に、60年を生きて来て、本日改めて本校への感謝の気持ちが溢れた次第です。

卒業50周年記念同窓会

高21回 鴻巣 茂

「令和」の幕開けが目前に迫る4月14日。私たちの卒業50周年記念同窓会は、恩師である大曾根・飯田・友部3先生にご来賓頂き、母校で開催されました。懐かしい面々が一堂に会すワクワク感に胸弾ませ、遠方から駆けつけてくれた方々もあって、109名が相集いました。記憶の片隅に眠る面影を探しつつ、胸名札で確認して名前を呼び合えば、一気に高校時代にタイムスリップ。多感で若さ煌めいた日々が走馬燈のように思い返されてきます。普段は家



族の介護や自分の心身の衰えに気を揉む年齢であればこそ、「元氣」を充電させる格好の場となりました。

当日は、改修工事を終え、一段と気品や優雅さを際立たせた旧本館前に、午前12時前に集合。国重文の学び舎を背に、全員の記念写真撮影からスタート。その後、体育館に移動し、総会・周年祝賀式に臨みました。

周年祝賀式では、高22回の鈴木良治君より祝辞を賜った後、各周年代表者が大野会長より記念品を頂戴し、最後に、全ての周年を代表して同級生の日置政克君が謝辞を述べ、式は終了しました。この後は、懇親会場のホテルマロウド筑波に向かいました。かつての通学路だった真鍋坂、新土浦駅跡・新川を通って行く、往時の光景が脳裏に彷彿と甦る不思議な感覚に酔い痴れました。懇親会では、司会の助川博夫君の開会宣言で始まり、幹事長挨拶は松井泰寿君。続く、当時の逸話や関係諸先生の近況にも触れられた3先生のご挨拶を感慨深く拝聴。飯田先生の乾杯のご発声の後は、クラス順に参加者紹介。そして宴は愈々佳境に...

戦後の高度成長期に、同じ年代を同じ空間で共に過ごし、部活動、「一高祭」での合唱コンクール・仮装競争、更には全校マラソン大会、クラス対抗スポーツ競技会等に汗を流し、熱狂した仲間たち。学園紛争で1度だけ東大入試が中止となった年度に卒業し、歩んできたそれぞれの道では、バブル崩壊期にも一所懸命に生き、斯界の泰斗として名を馳せていた(いる)人もいます。古稀を間近に、久闊を叙し、再会を喜び合う笑顔が溢れる中、変貌した互いの容姿に驚愕したり、高校での思い出や近況等に興じたりする醍醐味は同窓会ならではの、と言えます。増えた顔の皺には、積み重ねてきたものがそのまま刻まれていて、と思うと、まさに感無量。そして、談笑の輪の盛り上がりが高潮に達する中で、元生徒会長田口俊一君の指揮の下、校歌の大合唱となり、中締めに:

小原芳道君の閉会の辞の後は、2次会に行く人もいましたが、5年後も10年後もまた会おうと誓い合って散会。何の気遣いや気兼ねなどもなく、虚心坦懐にその場の勢いに身を任せて酒を酌み交わすのは、何とも贅沢で至福の時だと感じた一日でした。

卒業40周年記念同窓会

高31回卒業生 栗栖 宣博

平成から令和への改元が迫った平成31年4月14日(日)、我々高31回・理数科8回卒業生は、卒業40周年を迎え、進修同窓会総会・記念祝賀式そして同窓会に参加させていただきました。私たちが在籍した昭和51~53年度

の3年間を振り返ってみますと、高1の時は、現職の内閣総理大臣が逮捕されるというロッキード事件がありました。高2の時、王貞治選手がホームラン世界記録756号を達成、国民栄誉賞第1号を受賞しました。高3の時、次々とヒット曲を飛ばすピンク・レディーの「UFO」、「サウススポー」、「モンスター」が、レコードの年間売り上げ枚数ベスト3を独占、レコード大賞を受賞しました。その振り返りは、今でも体に染みついている同窓生が多いのではないのでしょうか。また、インベーダーゲームなどテレビゲームが進化し、学校帰りに駅前のイトーヨーカドーで、楽しんでいました。大学共通一次試験の第1回生として、雪の中を試験会場に向かった思い出もあります。

高校生活を思い返すと、苦しんだ定期試験や授業の思い出は薄れ、炎天下、4回戦まで勝ち進み、日没再試合までした野球の応援や、新土浦駅をはみ出して停車した長編成の筑波鉄道でスタート地点に向かった歩く会、そして一高祭や一高オリンピックなど楽しい思い出が鮮明にのみがえってきます。

この充実した学校生活を支えていただいた高校3年の時の先生方は、学校長遠藤俊夫先生、学年主任戸祭秀雄（理科）、学年副主任原尚道（英語）、A組担任松木幹太（英語）、B組担任戸部守（国語）、C組担任飯村弘（社会）、D組担任坂本高（国語）、E組担任横倉和夫（理科）、F組担任下代恒夫（数学）、G組担任染谷信洋（英語）、H組担任株木實（数学）の各先生でした。この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。

さて、ホテルマロウド筑波での同窓会。飯村、横倉、下代の各先生に

ご臨席を頂き、同窓生61名が集まりました。その輪の中に、この4月、母校に赴任した植木邦夫校長も同窓生として加わり、会は更に盛り上がりしました。参加者全員から近況報告があり、40年前に留まっていた記憶の時計がゆっくりと動き出し、楽しい時間が共有でき、また、青春時代を共に過ごした仲間との繋がりの大切さも再認識できました。

最後になりましたが、このような機会を設けていただいた進修同窓会役員、学年幹事の皆様から感謝申し上げます。

卒業25周年記念同窓会
高46回 松澤 博史

平成31年4月14日（日）、桜の花が咲き誇る、麗らかな日に進修同窓会総会及び卒業25周年記念祝賀式が盛大に行われました。

多感な青春時代を共に過ごした仲間との久方振りの再会を心から楽しみに、高校時代の甘く切ない思い出を心の中で思い返しながら会場となる母校へ向かいました。

総会前の受付において、多くの仲間との再会を果たしましたが、顔と名前が一致しない仲間も多く、良い意味で長い年月を強く感じた出来事でした。

同窓会総会が始まり、懐かしき校歌を応援指導部のリードの下、吹奏楽部及び弦楽部の熱き演奏に乗せて歌い、全身に身震いと目頭にも熱いものを感じました。土浦一高の卒業生であることの誇りを心から感じた瞬間でした。諸先輩が作り上げられた歴史と伝統を、私達がまだまだ若輩者ではありますが、引き継いでいかねばならない、と決意を新たにしました。祝賀式においても、ご祝辞及び記念品を頂戴し、今回の総会及



び祝賀式にお招き頂きましたことを改めて御礼申し上げます。

その後、会場を移し、卒業25周年祝賀会を行いました。学年主任の須賀田喜孝先生をはじめ9名の恩師の先生をお招きし、116名の同窓生が集まり、盛大に行われました。事前に同窓会準備事務局を有志の仲間で見守り、各自がその力を十二分に発揮し、当日を迎えることが出来ました。初めての試みとして、羽崎友康君が、ドローンを使った母校の動画撮影を事前に行い、放映致しました。会場の全員から驚きと称賛の声が上がります。土浦一高の仲間の力は流石だ、と感じました。

恩師の先生方との懐かしいお話と仲間との時間は、掛け替えのないものであり、何物にも代えることのできない宝物です。40代に入り、多忙極まらない中でも、これだけ多くの仲間が集まり、親睦を深め、新たな人と人との「繋がり」を持つ良い機会となったことは、この先の人生に

において、大きな支えとなるはずですよ。私達が各々の力を最大限に発揮し、これからの日本を支え続けることが、母校への最大の恩返しであると思います。

最後になりましたが、土浦一高の益々のご発展と、進修同窓会の益々のご隆盛と、同窓会員皆様のご健勝とご多幸を心よりご祈念申し上げます。

卒業15周年記念同窓会
高56回 辻 尚宏

平成31年4月14日、私たちは卒業15周年を迎えた卒業生として、進修同窓会総会及び祝賀式に参加させて頂きました。私たちが在学中に建て替えられた体育館に入ったのは卒業以来であり、懐かしくもあり新鮮でもありました。様々な方々からの御祝辞を賜り、卒業15周年を祝福されたことで、改めて土浦第一高等学校を卒業できたことの誇りを感じました。振り返れば平成13年4月、期待と不安の中、入学生として校門をくぐりました。その後、沢山の友人とかけがえのない思い出をつくり、卒業の日を迎えました。その日々を鮮明に思い出すのには、このような機会が必要だと改めて感じた次第です。

場所をマロウド筑波に移し、学年同窓会を開催しました。約100名の同級生だけでなく、宮川学年主任をはじめ、当時ご指導下さった担任の先生方と旧交を温める機会となりました。卒業後も繋がっていた友人とは勿論ですが、卒業以来15年顔を合わせることもなかった友人とも、思い出を共有することを通して高校時代と同じように笑い合うことができました。思いがけないことでもあり、大きな喜びでもありました。



平成から令和に変わりました。今は現在県立高校で教鞭を執っておりますが、生徒や学校を取り巻く環境の変化により、教師に求められる資質能力も変化してきていることを肌で感じます。ただ、生徒に対する愛情をしっかりと、我々の恩師が我々にそうであったように、誠心誠意向かっていきたいと強く思います。それぞれに与えられた職責は様々ですが、卒業生一同、そのような思いを胸に刻んでいくと確信しております。確かなことは、この日々が今の私たちを形作る上で重要な役割を果たしているということ。このような自分自身を見つめ直す機会を与えて下さったことについて、卒業15周年を迎えた卒業生を代表し、厚く御礼申し上げますと共に、母校の益々のご発展を祈念しております。

磐田南高同窓会の再来校

本部幹事 鴻巣 茂(高21回)

静岡県の磐田南高校同窓会の皆様(高田岩男・杉林里美・津川悟・田坂茜の4氏)が、4月6日(土)に来校されました。同校同窓会からは、昨年10月にも、浅羽浩同窓会長他12名(今回の4氏を含む)がお越しになり、その折には大曾根宏亮副会長・明賀靖子副校長等9名で対応致しました。再訪では、松井泰寿・鈴木義人両副会長及び飯村弘本部幹事と私とで遇するところとなりました。2022年に創立100周年を迎える同校は、記念誌作成等に向けた資料収集のため、2度の来訪に至ったのです。前身は、1922(大正11)年に創設された静岡県立見付中学校。その初代校長が尾崎楠馬先生(高知県出身・東京高等師範卒)で、初代教頭が小田原勇先生(鹿児島出身・早稲田大卒)です。零からの出発に際し、両先生は、磐田原の原頭に立ち、「学園を自分たちでつくろう。」と、先頭に立って汗を流し、校庭の拡張や防風堤築造、更にはプール・庭園造り等の土方仕事にも懸命に取り組み、勤労・鍛錬の劳作教育を通じた人間教育を推進されました。保護者から批判が寄せられても、「体を鍛えれば、文も栄える。」と説き、東大・京大等にも進学者を出す等、成果も証されました。これは、「ドカ中精神」と呼ばれ、「建学のこころ」として今なお受け継がれていると言います。小田原先生は在職6年10ヶ月。その後、榛原中(現榛原高)に校長として赴任されましたが、尾崎先生は、同校校長職を20年間も全うされました。構内には、尾崎先生の頌徳碑と小田原先生の顕彰碑とが建てられています。

郷里も出身大学も異にするこの2人が、最初に出会った場所が土浦一高の前身・土浦中学校。尾崎先生は、1907(明治40)年4月6日(土)に、28歳で赴任され、在職4年4ヶ月の間に、校歌を補筆・作曲されましたので、現在でもその名をよく目にします。小田原先生は、尾崎先生より半年前の10月に、23歳で赴任され、1年3ヶ月の在職期間でした。両先生とも国漢科の教諭で、同僚だったのは僅か9ヶ月。その間に、一緒に水上部の指導や寄宿舎の舎監等の校務に邁進しつつ、苦楽を共にする中で、意気投合し、互いに全幅の信頼を置く仲となりました。本校での両先生の様子や活躍ぶりについては、土浦中学校の校友誌『進修』、尾崎先生の『日誌』や『さむらい教師伝―小田原勇先生の話』等で窺い知ることができ、月刊『Acanthus』第3・13・17・22・48・49・50・57号でも、両先生またはどちらかの先生に関わるテーマを取り上げています。兎も角も、「ドカ中精神」の淵源を辿る重ねての来訪。昨年10月の際には、両先生の息遣いが今も感じられる旧本館内での情報交換が中心でしたが、再訪の今回は、尾崎先生の『日誌』等に登場する市内各所を探访・散策致しました。真鍋小、八坂神社、真鍋公園(旧総宜園・子規句碑)、赤池、神龍寺、東光寺、日新楼跡(現東電)、霞月楼(小田原先生下宿先南隣の料亭か)、端艇建造委員会が開催された中



左から、飯村・津川・杉林・松井・高田・鈴木・田坂の名氏。右端は、館内をご案内下さった霞月楼のご主人堀越恒夫氏(高19回)。「霞月楼」玄関で。

城会議所跡、川口川開門跡、水郷汽船宿(日高屋)跡、水上部端艇庫跡等のゆかりの地20ヶ所を1日ばかりで踏破。後日には、「多くの重要な舞台を効率的に回ることででき、理解を深めることができました。」「はからずも尾崎先生の初訪の同日同曜日に相会することが出来、運命的とさえ感じました。」等、前回来訪時と同様に、複数の方からご丁寧な礼状を頂き、加えて津川悟氏からは、前回の訪問記録『土浦物語』(A4判19頁)と同様の冊子『土浦再訪記』(A4判11頁)を頂戴し、大変に恐縮致した次第です。

創立120周年記念事業最終報告

- ① 120周年記念事業募金
 - 募金総額 81,862,366円 (2,593名)
- ② 旧本館校舎耐震補強改修工事関連に伴う募金の茨城県への寄付行為

ア 旧本館校舎耐震補強改修工事負担金	60,000,000円	(国県実施 330,048,000円)
イ 旧本館教室冷暖房設備費	8,500,000円	(県令達設置 10,496,196円)
ウ 旧本館校舎周辺整備費(樹木伐採剪定等)	11,528,897円	(県令達整備 6,420,000円)
エ 旧本館棟上避雷針設置		(県令達設置 14,040,000円)
- ③ 創立120周年記念式典費 6,798,376円
- ④ 旧本館校舎耐震補強改修事完了に伴う内覧会 446,490円
- ⑤ 記念誌『進修120年』発行 5,937,516円
- ⑥ 部活動新設部室建設 17,655,944円
- ⑦ 校旗及び体育大会等入場用校章旗新調 2,130,300円
- ⑧ 旧本館展示物移動費 5,292,602円
- ⑨ 体育館用スクリーン投影装置一式(高4回幡谷浩史様より) 2,732,400円
- ⑩ 「土浦一高幡谷グローバル奨学基金」(中40回幡谷祐一、高3回幡谷剛司、高4回幡谷浩史の御寄附金) 10,000,000円
- ⑪ 旧本館校舎教室内整備(同窓会別途積立金会計より)

ア カーテン設置	1,402,741円
イ 会議用テーブル・椅子の整備	4,149,252円

恩師からの便り

土浦中学から土浦一高へ

社会科 大曾根宏亮先生 (高4回)

(昭和37年4月〜昭和53年3月 平成4年4月〜平成6年3月在職)



会報編集委員会から母校での生活を振り返る機会を頂きましたが、皆様に特に何かを申し上げられるような教師生活だったとも思えませんので、主に、太平洋戦争中及び戦後の、母校の目まぐるしい変遷についてご報告申し上げ、皆様が往時を振り返るご参考に供したい、と思えます。

太平洋戦争前後の学校制度は多様で、小学校(戦争中は国民学校)6年、同高等科2年が義務制で、小学校6年修了時に、旧制中学校・同女学校、農・工・商業学校等に進学することができ、入学後は、5年間学習するのが一般的でした。また、小学校高等科修了時に農・工・商業学校に編入することも可能だったようです。中学校卒業後に進学する旧制高等学校は、各道府県に置かれておりましたが、入学生は男子だけで、在籍期

間は原則3年でした。同校は、卒業生が、東京・京都等の帝国大学(第二次大戦後7校)に進学できる唯一のエリート養成機関でした。なお、帝国大学には男子学生のみが入学でき、女子が入学できた帝大は、東北大学だけだったようです。

中学校卒業後に進学する旧制の農・工・商業、女子等の専門学校は、多くの道府県に置かれ、在籍期間は3年でした(茨城県では、旧制水戸高校と多賀工専)。

また、義務教育学校の教師を養成する師範学校へは、小学校高等科卒業後に入学するコースと中学校又は女学校卒業後に入学するそれとがあり、更に、師範学校卒業後に進学する上級学校として、東京と広島には男子系の、奈良には女子系の高等師範学校が設置されておりました。

私立系の大学は、予科2年、本科3年が原則で、旧制高校から帝国大学に進学した者に比べると、学習年限が1年少なかったようで、大学卒業後のサラリーにも差があったやに伺っております。

さて、ここで、母校土浦中学及び土浦一高について、振り返ってみましたと思います。土浦中学44回生は、昭和15(1940)年に入学し、5年間在籍して、20年に卒業されました。

だが、太平洋戦争激化の影響で、45回の16年度入学生は、在籍4年で、全員が同じ20年に繰上げ卒業を余儀なくされております。終戦後の21年には、修学4年で卒業する制度がまだ残っておりましてので、17年度入学生の一部は、修学4年で46回生として卒業し、5年間在籍された方は、翌22年に47回生として卒業されました。

21年度には、教育制度改革の動きが始まり、従来の小学校高等科2年を1年延長した3年の新制中学が各市町村に設置され、旧制土浦中学への22年度入学生はなくなりました。

翌23年度には、教育制度の大改革が行われ、旧制中学に代わって新制高校が導入され、土浦中学は、全日制・定時制・通信制の3コースからなる土浦第一高校として再出発しました。なお、23年春には、18年度入学生の一部が、土浦中学48回生として卒業し、20年度入学生の一部も、土浦一高併設中学1回生として卒業されました。

24年には、19年度入学生の一部が、旧制土浦中学49回生として卒業し、また、18年度入学生は、6年間在籍した土浦一高1回生として卒業されました。更に、21年度入学生の一部も、併設中2回生として卒業し、新制中学卒業生を高校4回生の仲間として、初めて迎え入れられました。

25年には、19年度入学生が土浦一高2回生として卒業し、新制中学卒業生が新たに入学し(8学級)、その中には、本校全日制最初の女子生徒2名も含まれており、正に新しい土浦一高のスタートの年となりました。

26年には、20年度入学生が、土浦一高3回生として卒業し、翌27年には、6年間在籍した最後の中学生が、

高校4回生として卒業し、また定時制1回生も、卒業しております。

なお、全日・定時・通信の3コース体制は、暫く続き、特に定時制には、若い時に学校生活を体験できなかった年配の方々や少年自衛隊員の方等が、数多く入学され盛況でした。学級数は時代により変化し、我々が最後の旧制中学生として入学した時には5学級でしたが、その後、海外からの引揚げ者等が転入し、卒業時には8学級になっていました。

39年度に、本校及び下妻一高に併置されていた通信制が水戸一高に統合され、後に水戸南高として独立したのは、ご存じのとおりです。

戦後暫くは、本校卒業生の多くは、文科系の学部に進学されましたが、やがて理科系志望者が漸増し、本校にも、44(1969)年に理数科(平成13(2001)年募集停止)が併設されました。また、平成8(1996)年には、推薦入学制も導入され、やがて、生徒の大学進学希望の文系・理系がほぼ同数になり、生徒の文理のコース分けは、3年進級時に行われることになりました。また、医学系大学への希望者が徐々に増加し、2年進級時に医学部コースも設けられるようになりました。

なお、児童生徒数は全国的に減少傾向にあり、本県においても、学校の統廃合・学級減等が現実的な問題となり、高校に付属中学を設置すること等も話題になっております。

最後に、「恩師からの便り」との標題でありますので、私自身のことにと少し触れておきたいと思っております。

私が土浦中学に入学したのは昭和21年で、卒業は27年の高4回です。母校には、社会科教諭として、昭和

37年からの16年間、勤務させていただきました。当初は、通信制担当でしたが、全日制に転じ、高18・19・22・25の各回生の学級担任と28・31回生の副主任とを拝命いたしました。校務分掌では、15年間生徒指導部に属し、生徒会の役員との交流を楽しみながら、カウンセラーとしての相談役も担当いたしました。部の顧問は、軟式野球部で、18・21・24・26・28回の選手諸君は、県大会を制し、北関東・関東・全国・国体等で存分に活躍されました。私個人としては、高校体育連盟の役員として、県大会や関東大会、特に前回の茨城国体(昭和49(1974)年)に関係させていただきました。

県教育研修センター・県教育委員会事務局にお世話になった後、竜ヶ崎一高では教頭として、江戸崎西高と並木高では校長として勤め、平成4(1992)年に母校に戻ってまいりました。母校での校長としての勤務は、僅かに2年でしたが、その間、先生方の素晴らしいご指導、生徒諸君のためまぬ努力の結果、部活動・生徒会活動等が飛躍的に発展充実し、また、大学への合格者も確実に増加し、東京大学合格者は30余名、筑波大学は50余名を数えるに至りました。

更に、母校の創立100周年を退職3年半後に控え、同窓会との更なる連携、県教育庁への働き掛け等に努めました。平成6年に退職した後、同窓会の副会長の1人として、100周年や120周年記念に係る諸々の事業を完遂させるべく、準備に当たり、会員の皆様の深いご理解と絶大なるご支援のおかげで、大過なく、その職を務め得ました。深謝申し上げます。

卒業生レポート

24

「外資系ビジネスの世界からコーチ・カウンセラーへ」 ラジオパーソナリティーへ

江田麻裕子 (高34回)



外資系企業の選択と学び

私は、大学で商学を専攻し、会計や国際ビジネスを学びました。当時、男女雇用機会均等法が施行され、男性と同等の、女性の社会進出が認められ始めたばかりでした。そこで、男女差の少ない外資系の英系銀行を選挙し、審査という、企業の業績や将来性で融資枠を決定し、英文報告書を作る仕事に就きました。

その時、香港への出張前日に起きたのが、「天安門事件」でした。当時、香港はまだイギリス領でしたが、香港の人たちは同胞として、ストやデモなどで追悼と抗議を表し、大人も子供も喪章を付けて目の真剣な行進姿は、今でもしっかりと目に焼きついてます。強烈な民族意識と自由（主権在民）への強い主張を目の当たりにし、日本人としての自分、また何を学び、するか、どうあるかの全てを自身で選択できるという、日本の

当然の環境が、いかに世界の中で恵まれていたのかを痛感し、その環境に自分がある意味や意義を考える、衝撃的な出来事を経験しました。

その頃はバブル後期で、本業よりも投資による利益の割合が高いなど、足元が脆弱な経済活動の健全ではない状態に疑問を感じるようになりました。そこで、地元に戻る事を機会として、一高の友人の勧めもあり、当時つくば市に本社があったインテルジャパンという米系半導体メーカーに転職しました。今では携帯電話でも出来ませんが、複数回線での電話会議やテレビ会議など、時差を調整しながら行う中、社内で初の女性マーケティングとなりました。

担当製品の責任者という立場で、製品の不具合に謝罪文書を出した時、担当セールスの、女性の名前で謝罪文書は日本企業の客先には持っていけない、という、まだまだ日本では女性……という現実に向き合う苦しい出来事もありました。

一方、社内環境の学びは非常に多く、外部の教育会社が社内の一つの部署として設置され、英会話、異文化理解、英語のプレゼンテーション研修まで、会社の費用負担で勤務時間中に学べるという非常に恵まれた教育環境でした。仕事で繰り返したミスがある人に「何で出来ないんだ」「努力しろ」ではなく、まず教育担当者をつけるという、現在のメンター制度の要素が社内風土としてもありました。個の責任や能力に依るだけでなく、トラブルに対して解決の第一の選択が「教育」であるという事は、確かに、人的資源の質の向上に繋がります。本人自身の将来的なキャリアの点でも、組織の最大効率の点からも、意義のある事で「教育」の重要性を再認識しました。

また、相手と考えが異なり、調整や解決が必要な時には、迅速かつ率直に、一対一やグループでミーティングをして、どちらかの意見の凌駕ではなく、折衷案や着地点を作る協働のためのコミュニケーションの大切さを痛感したことは、後の私の仕事にとっても有意義な経験となりました。

コーチ、カウンセラーに

出産のための退職を機に、もともと興味があった心理の勉強を始めたところ、知人から大病院での術後の子供のIQ検査の依頼があり、ある時、検査が終わって病棟に戻った「何をしたいんですか？別人のように活発になりました。」と担当医が飛んできました。検査の前後の緊張をほぐすための会話の時間で、思ったままを話せること、それをきちんと受け止めることが、心に大きなプラスの影響を与えることを実感し、それが、私自身三人の出産、子育てと並行しながらコーチ、カウンセラーの学びを続ける原動力となりました。

現在

都内の教育委員会からのセミナーの依頼から始まり、つくば市の男女共同参画室、家庭教育学級、看護学

校などで、コミュニケーション、怒りのコントロール、メンタルヘルスなどの講義やセミナーの講師を務め、また対人援助職の人のための本の出版で、メンタルヘルスの執筆を担当するなど、活動域が広がりました。

個人向けに、目標達成にコーチングを、成人のうつ病や心に抱えている問題、子どものゲームやスマホ依存、不登校、親子の問題にはカウンセリングを行っています。

今の子ども達は非常に苦しく、日本の青少年の自己肯定感低さは世界中でダントツに低く、何で苦しんでいるか子ども自身にもわからず、いじめ、不登校、ひきこもり、自傷行為、窃盗などの問題行動として表れています。それは同時に親や大人も苦しんでいることに繋がっています。

また、6年ほど前から、「発達障がい」「専門のクリニックで、カウンセリングや子供の発達障がいの特性、問題行動などに、親がどのように対応するかを学ぶ、ペアレント・トレーニングセミナーを担当しています。

その他、何かボランティアをと思いついて支援のNPOで月に一回ママのためのコーチングセミナーを担当しています。

そして、つくば市のラジオ放送局に転職したインテル時代の同期から、ラジオパーソナリティーに勧誘を受け、躊躇はあったものの、「あなたのままでいい」という、自己肯定感に触れるメッセージを届けられる機会と思い、生放送の番組を担当し、11年目を迎えました。東日本大震災時には、ラジオという媒体に求められる情報の精度や取捨選択、選曲など、難しさと同時に、可能性と限界を感じる機会となりました。ま

た、一高同級生からの声掛けで、行政の有識者会議メンバーとして、微力ながら地域貢献の機会も頂いています。

人と人の繋がりとこれから

前述の様々な仕事は、周りの人との繋がりが広がってくれたことが大きく、また年々、一高同窓生の先輩方や、先輩と繋がる機会が増え、恩師との再会もできました。その繋がりは同窓生を繋ぐために、労をいとわず動いて下さる先輩方（この進修同窓会会報もその一つ）に依るところで、一高同窓生の絆は本当に心強く感じています。

今後は、この人と人の繋がりを大切に、真摯に自分の出来ることを提供し続けること。また、当事者が自分たちでも早期に問題を解決できるように、コーチの育成も考えています。そして、発達障がいも、多くの人に理解してもらおう活動も、これからすべき事の一つと感じています。



ラジオつくば (FM84.2MHz) の「Wh@t Tsukuba!」で、毎週金曜日11:00~13:00のパソナリティーを担当しています。PCでサイマルラジオでも聴取可能です。

支部・OB会だより

筑波銀行桜水会支部

大久保和美 (高38回)

「筑波銀行桜水会」は、関東つくば銀行と茨城銀行とが合併した平成22(2010)年に誕生し、来年には10周年を迎えます。

当会の誕生に至る経緯を振り返りますと、旧関東銀行桜水会として土浦市内での毎年の例会開催を重ねてきた中、平成15年の旧関東銀行と旧つくば銀行との合併後、前述の旧茨城銀行との合併により現在の旧茨城銀行と、平成24年には職場支部としての仲間入りをさせていただきました。令和元年7月時点での会員は48名となっております。

これら3つの銀行は、各行とも茨城県内に本店を有する地方銀行であったことから、土浦一高の卒業生が多く在籍しており、これまで数多くの役員を輩出し、地元経済への貢献に尽力してまいりました。中でも、平成24年6月には、藤川雅海氏(高23回)が土浦一高卒として初めての頭取に就任し、今年6月までの間、当行のトップとして活躍頂いたことは、我々桜水会メンバーとしての誇りであり、また当桜水会会長として、今なお力を注がれており、我々会員一同も地元茨城への貢献をすべく、心ひとつに取り組んでいるところであります。



さて、筑波銀行と我々の母校である土浦一高とは、平成28年に「連携協力に係る協定」を締結し、当行人材による企業教育プログラムの実施や当行が実施する調査活動への土浦一高生の協力など、様々な連携事業を行ってきております。当行は、「地域になくてはならない銀行」として、母校との連携活動に積極的に取り組んでいく所存であり、今後とも相互に有益な取り組みとなるようご協力を切に願うものです。

結し、当行人材による企業教育プログラムの実施や当行が実施する調査活動への土浦一高生の協力など、様々な連携事業を行ってきております。当行は、「地域になくてはならない銀行」として、母校との連携活動に積極的に取り組んでいく所存であり、今後とも相互に有益な取り組みとなるようご協力を切に願うものです。

ところで、今年度の例会(7月実施)は、4月に着任された植木校長(高31回)、進修同窓会からは竹井副会長(高19回)を霞月楼(土浦市)にお招きし、当会からも30名を超える参加者のもと、盛大に開催されました。

龍ヶ崎支部

山村 邦男 (高12回)

本支部では、総会の開催日に、旧本館(国重文) 改修工事後の入館一番乗りをさせてもらった。この建物のゴシック様式建築は、12世紀から16世紀に掛けて、ヨーロッパで栄えるとともに、イギリスでは、18・19世紀に、その合理的構造が再評価されたものであった。この様式を当時の一中学の建物に取り入れたのは、進んだ自由なイギリス文化を学ばせようとしたのではないかと、思う。茨城の歴史を遡れば、江戸時代には、佐竹氏は、徳川幕府により秋田に追われ(常陸太田市には、佐竹氏時代の地侍・農民の末裔の人達がいる、今でも「おらの殿様は佐竹氏。」と言っているとか)、親藩でも尾張や紀州より格下の徳川水戸藩が置かれた。土浦には譜代の土屋氏が入り、水戸藩の目付の役をしていた。龍ヶ崎には、伊達藩の飛び地と水戸藩の

した。例会の中では、現在の土浦一高の活動や在校生の状況、進修同窓会の活動状況などのご報告を頂くとともに、その後の懇親会においては、より詳細なお話を頂戴することができ、会員一同、非常に貴重な時間を共有できましたことに対し、大変感謝しております。

懇親会の最後には、全員が輪となり肩を組み、声高らかに校歌を歌い上げました。毎年恒例である校歌の合唱は、母校である土浦一高の卒業生であることを改めて誇りに思うとともに、世代を超えて今後の活躍を誓い合う、貴重なひとときでありました。

末筆ながら、会員一同、土浦一高及び進修同窓会の益々のご発展を心からご祈念申し上げます。

最後に、最近知った母校に関する情報で驚いたことが2つある。1つは、私達の頃にあった進学のためのクラス分けが、その時の在校生の要望を学校側が受け入れ、廃止されていたことだ。これに関しては、私達

代官達の領地とがあった。明治に入ると、廃藩置県により、水戸中心の茨城県が設置された。明治政府は薩長中心に動き、茨城は、国全体の発展からは取り残されがみであったが、明治30年4月7日に水戸にあった茨城県尋常中学校の土浦分校が創設され、県南の教育の拠点となった。幾星霜を重ねる中で、土浦分校は、茨城県立土浦中学校、茨城県立土浦第一高等学校と改称しつつ、今年度は122年目を迎えている。



の時もホームルームで議論したことがあったが、当時の担任は、議論には口を挟まず聞いていて、「自分達で決めたら。」と言っていた。自由な校風が脈々と受け継がれていたかの廃止なのか、とも考えた。もう1つは、雑誌「週刊朝日」で、平成31年度茨城県高校入試の偏差値順位の記事を見つけ、そこでは、母校が第1位ではなく、第3位になっていたことである。が、3年後の大学入試では、生徒諸君の並々ならぬ努力と先生方の素晴らしいご指導とによって、県下随一の進学実績を誇る学校となるのは、唯々驚嘆するばかりである。

母校だより

第72回一高祭

第72回一高祭実行委員長
3年D組 青山 拓叶

今年度も、長く素晴らしい歴史と伝統を持った「一高祭」を、6月1日(土)、2日(日)の2日間におたり開催できましたことを、大変嬉しく、そしてありがたく思います。この場をお借りしまして、ご協力いただきました全ての皆様に心より御礼申し上げます。

今年度は、5月1日に「平成」から「令和」へと新たな元号にかわり、準備の段階から全体として一新ムードのなかで開催を迎えました。昨年度まで先輩方が築き上げてきたものに加え、令和以降の新たな一高祭のかたちを作り上げていくための土台



「シャルトル大聖堂」をモチーフに作成したGATE

となるように、と9つの実行委員会を中心に、1年間かけて準備を進めてきました。今年度は、特に、赤の広場にステージを新設したり、ホームページにおいて、お知らせの掲載や各クラス企画の待ち時間の表示をしたりするなどの改良を加えたり、一高祭の公式ラインのアカウントを作ったりなど新たな試みを行いました。

第72回一高祭のテーマは、「船出」でした。このテーマは元号が変わるといふことも背景にありましたが、このテーマには生徒各々が、この土浦第一高等学校から、それぞれの夢や目標に向かって歩んでいってほしいという思いが籠っています。自分は、生徒が主体となって、ひとりひとりが輝くことができるこの学校、

そしてそれを象徴する一高祭が、これからも長く歴史を刻み続けてほしいと思います。

第72回一高祭は、2日間で合計5857人の方にお越しいただき、大盛り上がりすることができました。ご来場の皆様、ありがとうございました。

現在は、来年の第73回一高祭に向けて、後輩たちが、新体制となった実行委員会を中心に準備を進めています。これからも一高祭は常に進化を重ねていきます。ぜひ、来年も一高祭にお越しください、楽しみにしています。



茨城県教育委員会教育長表敬訪問、茨城県庁で (2019.7.26)

国際地理大会出場

3年D組 飯田 菜未

私は、7月31日〜8月5日に香港で開催された第16回国際地理オリピック大会に参加させていただきました。この大会へは、日本国内において応募者数1450名の中から計3回の選考会を得て、選抜され、日本代表として臨みました。

この大会は、地図や景観写真、資料などを読み解く、総合的な地理力を競うもので、種目には、マーク式テスト、記述式テスト、そしてフィールドワークの3種があり、全て英語で行われます。メダルは獲得出来ませんでした。様々な国の選手との交流の中で、国際化の時代を生きていくためには、もっと積極性や英語力が必要だと痛感し、大変有意義な体験をさせていただくことが出来ました。ありがとうございました。

海外フィールドワーク2019

探究学習推進室長
豊島 卓

平成26年度に、文科科学省からスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受け、平成31年3月に無事終了した。今年度は5年間の成果を踏まえ、2年生7名がマレーシア・シンガポール(8月13日〜21日)、13名がオーストラリアのリズモア(8月13日〜20日)でフィールドワークを行った。

今年で5回目となるマレーシア工科大学(UTM)・マレーシア日本国際工科院(MJIT)では、岩本浩二先生(筑波大学から派遣)、石崎浩之先生(茨城県出身)のご指導の下、現地院生とのワークショップ、院生アテンドによる市内フィールドワーク、調査結果プレゼン等を実施した。また、



St. John's College, Woodlawn Ex-Students Association (オーストラリア) 訪問風景

プライムステイを経験し、現地の生活を肌で感じる機会を得た。シンガポールでは、水害リスク軽減を担う給水所であるマリナーバラージを訪問し、シンガポールの抱える水資源問題について、三菱重工アジアパシフィックでは、海外で働くことの意味を駐在員の方々と学んだ。

4回目となるオーストラリアでは、ホームステイしながらサザンクロス大学を5日間訪問した。昨年までタスマニア大学でお世話になったピーターウィルソン副学長の極地研究の講義や同大学コアラ保護センター訪問を通じ、自然環境を守る国民意識の違いを学んだ。セントジョーンズ大学ウッドローン高校では、法学・化学・美術への授業参加や各自の研究テーマのプレゼン等を行い交流を深めた。

少人数の一行のため、生徒の参加意識が高まった。質疑応答では全員が発言し、大学や高校の訪問では現地の方と1対1で話す時間が多く取れ、各自の研究テーマが深化した。生徒からは、外国人との交流を通じて視野が広がったことや、海外で活躍することへの意識が高まったことが述べられており、当初目的とした「幅広い視野と国際意識の涵養」がほぼ達成できた。

部活動報告

将棋部

将棋部は15人の部員で活動して... 3年H組 藤枝 哲史



会場となった佐賀県「佐賀のへそ ふれあい交流センターネイブル」で

進路状況報告

東大20名(公立高全国6位) 京大11名・東北大26名 筑波大59名(全国1位) 国立大医学部医学科23名

進路指導部長 横倉 敏治

今年度は前年度(2018年度)入試の影響が色濃く出た入試となった。2018年度入試では私立大の入学定員の厳格化に対応するため、私立大一般入試の合格者数が大きく減少し、文系学部を中心に難化した。

今年度は、今春も後期日程を廃止・縮小する動きがみられ、志願者数は8年連続で減少となった。今春のセンター試験では、「英語(リスニング)」、「国語」などの主要科目で平均点が上昇し、高得点層は増加した。

本校の合格状況については下の表のとおりである。難関国立10大学の合格者数は、北大10名、東北大26名、東大20名、東工大3名、一橋大4名、名大4名、京大11名、阪大4名、神戸大4名、合わせると86名であった。

次に医学部医学科については、旭川医科大2名、北大1名、弘前大1名、東北大1名、秋田大2名、山形大2名、福島県立医科大1名、筑波大4名、新潟大1名、広島大2名、徳島大1名、高知大1名、宮崎大1名、琉球大1名、合わせると23名であった。国公立大以外では、自治医科大1名や防衛医科大2名を含む11名の合格者が出た。

また、新卒生の国公立大合格者数は170名であった。最近10年間で最も多かったのが、2015年度入試の139名であることを考えると、170名は記録的な数字であると言える。現役進学率は約7割であった。

平成31年度入試合格状況

Table with 4 columns: University Name, New Graduates, Former Graduates, Total. Lists various universities including Keio, Waseda, and others.

Table with 4 columns: University Name, New Graduates, Former Graduates, Total. Lists medical departments from various universities.

Table with 4 columns: University Name, New Graduates, Former Graduates, Total. Lists medical departments from national public universities.

Table with 4 columns: University Name, New Graduates, Former Graduates, Total. Lists private universities and their medical departments.

Table with 4 columns: University Name, New Graduates, Former Graduates, Total. Lists private medical departments.

Table with 4 columns: University Name, New Graduates, Former Graduates, Total. Lists private medical schools.

定時制の活動

県内人気度ナンバーワン

教頭 鮎川 好夫

今年度も30名近くの生徒たちが土浦一高定時制に入学しました。夜間の定時制高校としては県内で最も人気のある学校です。生徒たちの多くが昼間はバイトに励み、経済面で家庭を助けるだけでなく、礼儀やコミュニケーション力、基本的な生活習慣やタイムマネジメント力を身に付けています。また学校では、いろいろな行事や部活動等を通して、幅広いもの見方や考え方を涵養し、一人ひとりの生徒がそれぞれ人間力を伸ばしながら、社会へ巣立って行く準備をしております。ここではそれらの行事のいくつかをご紹介します。

◆星光祭◆

昨年11月には2年に一度の土浦一高定時制文化祭「星光祭」が開かれました。前夜祭では予定していたよりも多くの生徒たちが歌や演奏を披露してくれました。先生方も生徒に負けずこの日のために練習を積み重ねたD.A.P.U.M.Pの「U.S.A.」を熱演していました。教室企画では全日制の生徒や先生方にも見に来て



星光祭の1コマ

◆校外学習◆

5月のゴールデンウィーク明けには校外学習が行われました。今年度より文化祭のない年にはデイズリゾートに行くことに決定し、1年のデイズリゾートに続き、今年度はデイズリゾートで一日を過ごしました。生徒の中には初めてのデイズリゾートという者もあり、天候にも恵まれ思いっきり満喫したようです。

◆定時制体育大会◆

6月の定時制通信制体育大会県大会では、バドミントン、ソフトテニス、卓球、陸上に各選手がエントリーし、選手たちは全力を尽くしていました。その結果、ソフトテニスのチャサートアイコさん・天貝知美さんペアと、陸上5000メートル走の榎村和璃くんが、8月の全国大会に出場しました。ソフトテニスの全国大会は千葉県の白子町で、陸上は東京の駒沢競技場を舞台に行われ、各



陸上男子5000m

県代表選手たちと競い合い、それぞれ素晴らしい経験を積んでくれたと思います。

◆社会人講話◆

定時制では昨年度より年複数回の社会人講話を実施しております。今年度の会報でもご紹介した尾張屋社長櫻井光孝さん、本校副校長明賀靖子先生、NPO法人キドックス代表上山琴美さんに続き、今年2月にはパラリンピック出場を目指しているゴルフボール日本代表の山口凌河さん、5月には茨城を代表する経営者である坂東太郎会長青谷洋治さん、そして10月には「看取りの医者」として全国的に有名な本校全日制卒業の平野国美さんなど多彩な方々に講話をお願いしております。



青谷洋治氏による社会人講話

土浦一高定時制ではこれからも、生徒たちに自分の活躍できる場を提供しながら、自己肯定感を高め、社会との繋がりを意識していけるような教育活動を展開していければと思います。

職員室だより

理科室より

主任 高田 亜紀

理科は、特別棟1階に化学、2階に物理、3階に生物の職員室と実験室とがあり、毎日の授業を中心とした理科教育全般に携わっております。職員は、齊藤孝通(本校6年目・物理・1B担任・進路指導部)、前田将貴(5年目・物理・3H担任・教務部)、鮎川安男(2年目・物理・教務部)、鯨雅之(2年目・物理・講師・高23回)、浅野武雄(13年目・化学・2C担任・進路指導部・高32回)、田中佑二(3年目・化学・3E担任・教務部)、原田剛卓(2年目・化学・1A担任・生徒指導部・探求学習推進室)、阿内大冠(2年目・化学・渉外部)、増子勝男(6年目・生物・2年副主任・生徒指導部)、横田宏之(本校通算16年目・生物・進路指導部・医学部進学コーディネーター)、高田亜紀(4年目・生物・1年副主任・生徒指導部)、鈴木佐与(9年目・実習講師・保健部・渉外部)の12名です。知的好奇心や探究心に溢れる生徒に日々関わられることを、職員一同、誇りに感じながら指導に当たっているところです。当教科に関わる教室としては、物理実験室が2つ、化学実験室が2つ、生物実験室が1つの計5つの実験室があり、非常に恵まれた学習環境にあります。実験準備室前の陳列ケースや掲示板には、様々な標本や模型、実験装置、書籍、科学関係のポスターなどが展示されており、醸し出される理科室周辺の独特の雰囲気とともに本校の歴史と伝統をも感じられます。また、用意されている問題

演習用の添削用紙などを活用し、勉学に真摯に向き合っている一高生が多く、自らの進路を意識し、熱心に学んでいる生徒たちの姿は頼もしい限りです。

私たち教員としては、日々の指導はもちろんですが、様々な機会を捉えて、生徒たちの自然科学に対する興味関心を高めるための取り組みにも努めています。毎年3月下旬にはアメリカ東海岸方面への海外科学研修(SEG)が行われていますが、理科から海外研修担当の教員が引率に加わり、企画運営や事前事後学習に携わって、有意義な研修が行われるようにバックアップしています。理科独自の行事としては、毎年11月に希望生徒を対象とした科学実験講座を計画・実施しております。大講学や研究施設から各分野の第一線で活躍されている研究者をお招きして、発展的な内容の実験講座を行っており、毎回多くの生徒が参加しています。今後も、より一層生徒への理科指導を充実させていきたいと考えています。

会費納入へのご協力のお願い

平成30年度会費として、2,266名の皆様から7,529,000円を納入していただきました。会費は、各事業の遂行に充てられますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

進修同窓会規則(抜粋)

第12条 本会の経費は第10条の入会金、年会費、終身会費及び簡志寄付金を以て充てる。

一、年会費は、6年目以降は、3千円以上とする。

二、終身会費は、3万円以上とする。

住所変更手続きのお願い

住所や電話番号等を変更された方は、左記のEメールへ送信下さい。又同窓会会員名簿の不明者欄に掲載されている知人や友人がおりましたら、本人に事務局へ連絡するようお願いいたします。御協力よろしくお願いたします。

進修同窓会事務局
Eメール shinsu@suichu1.hbk.ed.jp
FA X 029-1826-3521

平成30年度 進修同窓会決算書

収入総額 12,472,489円
支出総額 9,640,204円
差引残額 2,832,285円(平成31年度へ繰越)

平成31年度 進修同窓会予算書

収入総額 11,643,000円
支出総額 11,643,000円
差引残額 0円

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 比較増減(△), 備考. Includes rows for 繰越金, 終身会費, 年会費, etc.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較増減(△), 備考. Includes rows for 繰越金, 終身会費, 年会費, etc.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 残額(△), 備考. Includes rows for 総会補助, 会報発行費, 通信費, etc.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較増減(△), 備考. Includes rows for 総会補助, 会報発行費, 通信費, etc.

上記のとおり決算しました。

平成31年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 浩史

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成31年3月31日

監事 熊木士郎
監事 松井泰寿
監事 杉山博

平成31年4月14日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 浩史

寄附金がありました
(平成30年11月1日～令和元年10月31日まで)
谷田部支部 (会計係風見順一様) 130,014円
大曾根通也様 (高校4回) 100,000円

編集後記
平成が終わり、令和の新时代が始まりました。平成の時代は、東西冷戦の終結、天安門事件、ベルリンの壁崩壊で始まり、国内では、消費税の導入で始まり、バブルの絶頂と崩壊、30年にも及ぶ長期デフレの時期でもありました。令和元年を迎え、世界は、「パックス・アメリカーナ(米主導の平和)」、「グローバリゼーション」の時代から、「地政学リセッション(悪化)」、「ポベリリズム」に変化し始めています。今号では、表紙については、従来の校歌と目次とを割愛し、空撮による母校の俯瞰写真と、文字を大きくし読みやすくした大野新会長のあいさつとにしました。恩師からの便りでは、長年、本会を支えてこられた大曾根前副会長に母校での足跡を振り返っていただき、「卒業生レポート」では、女性が益々活躍する時代にあつて、地元でラジオパーソナリティーを務められる江田麻裕子さんに、母校や現況について寄稿して

令和2年度 進修同窓会定期総会のご案内
次年度進修同窓会・卒業周年記念祝賀式は、次のとおり開催されます。
一、期日 令和2年4月12日(日)午後1時～
二、場所 土浦第一高等学校体育館
卒業60周年 高12回、定10回
卒業50周年 高22回、定20回
卒業40周年 高32回、理9回、定30回
卒業25周年 高47回、理24回、定45回
卒業15周年 高57回、理34回、定55回
一 一般会員・周年記念該当会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。

資料提供のお願い
旧制中学校・高校の同窓生の皆様が発行された記念誌等(データでも可)を本部にご惠贈下さい。展示・保存・校史編纂の資料として活用させていただきます。